

続々 分相応に風が吹く

上月 明

『前作までの概略』

松崎龍二が特別養護老人ホームに事務長として勤めだしたのは、十年前からである。以前は、施設長が勤務医だった民間病院で医事課長をしていた。施設長から事務長として特別養護老人ホームの運営を手伝ってほしいと誘われ、転職したのである。

施設長は十五年前に、民間病院の勤務医で貯めた私財を抛出し、特別養護老人ホームの運営を始めていた。当初の施設長職は、他の施設から経験のある職員を雇い六十歳定年で退職したのを機に、五年前から施設長に就いていた。今は施設の嘱託医と運営母体である社会福祉法人の理事長を兼ねている。

六十二歳の龍二は施設の規定から、六十歳で退職しなければならなかったが、施設のオーナーであり、精神科医でもある施設長から、もう五年は事務長として勤務してほしいと頼まれていた。年金もあり適度の蓄えもあり、生活に困らなかったが、仕事を辞めても特別何をしたいというものがない。

何もしなければ、認知症になつてしまいたいそうに思えて、ボケ防止の意味で、適度の緊張感が味わえる職場でもあった。また自由になる小遣い銭稼ぎを兼ねて勤めていた。

事務長と言えば、施設長に次ぐポストであり、見栄えが良いかもしれない。現実にはオーナーである施設長に気遣い、部下に十分働いてもらうために、言いたいことを半分に抑え、気配りをしながら指示を出している。

龍二は妻と一緒に居ても、女性としての魅力を感じなくなってしまう。職場や家庭内の孤独を癒やすために、職場の外に生きがいを求めた。その生きがいは「ナナミ」である。

ある風俗の会員クラブで見つけた彼女。女優の大島優子に似ていた。週一回土曜日にか出勤してこない。平日は派遣会社に籍を置き、病院で医療事務をしていた。休日に会員クラブでアルバイトをしているのである。ナナミの年齢は二十二歳、龍二は彼女に出会って、一目惚れをしてしまい、会員クラブに通うようになった。

施設内では昨年に正規職員として雇用した四十歳の村津に、利用者に対する虐待が疑われる事案が二件発生した。確証はないが疑いがある以上、念には念を入れて用心をすべく、村津に介護課からデイサービス部署へ異動の内示を言い渡した。

介護課からデイサービス部署への異動は、家庭を持ち住宅ローンを抱えた村津には、夜勤手当がなくなることになり、一層生活が苦しくなる。村津から介護課で勤務したいと懇願するのを無視し、龍二は年度途中であったが、施設長の了解を得て、十二月一日にデイサービス部署に異動させた。

龍二は、立場の弱い者をいじめてしまった気持ちしが拭いきれない。虐待防止のために行った人事異動。間違ったことをやっただけとは思わないが、気分が晴れない。

三月に入所した北条菊野のキーパーソンが「ナナミ」だった。本名は「北条美咲」といった。菊野の入所日に美咲を呼び止め話をすることができた。しかし、彼女は会員クラブを辞め、風俗から足を洗っており、龍二の入り込む余地はなかった。落胆を覚えた龍二であったが、入所者のキーパーソンとしての繋がりを持たただけでも安堵した。

その一方で、村津がデイサービスの送迎で怠慢な行動から利用者にケガをさせてしまう。そんなとき村津が北条菊野の孫であり、美咲の従兄であることを知らされ、龍二は愕然とする。

そんな中、龍二に無理矢理異動させられて恨みを持つ村津から、風俗店に勤めていた美咲との関係を知っていると匂わされた。弱みを握られたと思う龍二の不安な気持ちに付け込み村津は介護課

への復帰と事故処分の軽減を要求してくる。噂になれば施設内の社会的信用の失墜と施設長からの叱責を恐れた龍二は、要求を受け入れる。施設長の了解をなんとか取り付け、介護課に村津を異動させる内示を出した。『前作までの概略終了』

四月一日の人事異動で村津を介護課に復帰させた。村津の姿は見るのだが何も言っていない。松崎龍二は自席の椅子を半回転させると、窓から見える特別養護老人ホーム周辺の桜の花びらが、風に吹かれて散ってしまっていることに気がついた。

三月一日に北条菊野が入所して以来、美咲の面会頻度は二週間に一回程度だった。受付窓口で面会票を記入してから入所棟に行く。事務所から彼女の姿を見ていると、視線が合うときもあるが、軽く会釈をするだけである。龍二に声をかけてくれるのではないかと期待をするのだが、気配も見られず、ロビーを通り抜け入所棟へ向かう彼女の後ろ姿を見送る。美咲が風俗店に勤めていたころのナナミでないことを、頭でわかっているのだが、気持ちと身体がなかなか割り切れない。

——美咲は会員クラブでナナミと名乗っていた。何回目であっただろうか。龍二は彼女を指名し、パラダイスを夢見て意気揚々と会員クラブを訪れた。近頃、年齢的なか性欲の減退を感じ、バイアグラを使用していた。鞆の中に入れて持ってきたつもりであったが、その日に限って入れ忘れたのだ。時間指定のため、取りに帰ることもできず、バイアグラなしでもいけると、少しは自信があつて臨んだが、やっぱり関係をもつことができなかつた。下半身に力を入れ、精神を集中させたが反応は中途半端だった。焦れば焦るほど気持ち冷めていく。メンタルが乗らなければ行為はできない。「どうしたの？」と優しく声をかけてくれた。ショックだった。好きな女性を前にして、何もできなかったのだ。男として……屈辱に似た惨めさだった。「だめなようだ。できない。

歳だな」と言って、顔では笑っていたが、精神的に落ち込んだ。

そんな龍二の気持ちを察したのか、「二十歳代のお兄さんでも、勃起しない人もいるわよ。そんなお客さんを何人も見てきたよ」そう言って、龍二の胸の中に抱かれてくれた。ナナミがビジネスとはいえ、優しく龍二と接してくれた。いや彼女の優しさはビジネスから出てきているものではない。本性なのだ。性行為の失敗をあざ笑うのではなく、心の傷口を舐めて治してあげようとする包容力を感じた。そんな彼女とセックスができなくても、肌を合わせているだけで心が癒やされた。それでもナナミと関係が持てなかった自信喪失が重くのしかかった。

帰り際、ナナミは龍二の手を握り、視線を合わせるとニコツと微笑んで、「また、リベンジしてくださいね。次回はきつとできますから……」と、握っている手に力を入れて励ましてくれた。この言葉で龍二は生き返るくらいの元気をもらった。そして、次の機会にリベンジを果たすことが出来たのだ。あのときの気持ちは、六甲全山縦走の五十六キロを踏破したとき以上の喜びだった。それ以来、年齢差が四十歳であっても、龍二はナナミから離れられなくなってしまった。――

美咲が面会に来ているときに、ロビーで待ち伏せをして、声をかけたが「祖母がお世話になり、ありがとうございます」の社交辞令の言葉しか返ってこない。

「少し話をしませんか」と龍二が言っても、「何か」と構えられてしまうと、次の言葉が出てこない。「用事がないようでしたら、帰らせていただきます」の返事である。明らかに龍二を避けていた。

美咲が会員クラブに出ていた頃の話をしたくないのはわかる。風俗の話を出さなくても暗黙の言葉として出てしまっているのかもしれない。彼女とうまくいかなければ、人生のすべてがネガティブな気持ちになってしまう。

最近、龍二は自分の心に何らかの変化を感じ取っていた。風俗店である会員クラブに行く意欲が薄れてきたのである。ナナミの容姿に似ているレナを求めてだが、ナナミほど引きつけるものを感じられない。レナに会いに行こうとする気が湧かない。今までなら、会員クラブに通うことによって生きがいを感じることもできた。高齢化による体力の減退もあるが、やっぱり、ナナミのいない会員クラブでは、心の安らぎを覚えることはできない。

龍二は特別養護老人ホームに出勤すると、日課として入所者が元気で生活しているかどうかを確かめるためデイルームに入る。自然と視線の先は北条菊野の姿を探していた。

「事務長、誰かをお探しですか」

はっとして、声の方に顔を向けると村津だった。

「いや、入所者さんの顔を見に来たんだ」

「なんだかこの頃、元気がないように見受けられるのですが」

少し気持ちが沈んでいることは自分ではわかっていたが、村津に見抜かれていたことに驚かされた。

「普段と変わらないよ。それより村津君はどうなんだ。出勤日は菊野さんの世話をしているのかね」

「はい、今も部屋で少し話をしていたところですよ。祖母も良い施設に入れたと喜んでいました」

「それは良かった」

そう言って村津から離れようとしたときだった。

「今日の昼からですが、美咲が来ることになってるんです。事務長に時間があるのなら、雑談でもしてやってくださいませんか」

一瞬、気持ちがぐらついた。美咲とは菊野が入所したとき以降、話らしい話をしていない。なんと返事をしていいのか迷った。彼女の赤い糸が切れている現状を考えると、素直に喜んでいいのか、それとも村津の何らかの意図が含まれているのか。

「美咲さんも仕事が忙しいのだろう。それに会って特別話をする用事もないんだから。いいよ」

龍二は軽く頭を振り、申し出を否定した。村津の真意がわからない限り、事務長として軽率な行動はとれない。

「少しぐらい大丈夫ですよ。祖母を見舞ったあと事務長に声をかけるように、美咲へ連絡を入れておきますから」

「余分な気を遣わなくてもいいから。そんなことより仕事を頑張ってくれたまえ」

内心は村津の言葉に期待するものがあつたが、その言葉を振り切り事務所に戻った。

龍二は席に着くと道中総務課長に声をかけた。

「四月以降のインシデント報告はどうなってる」

道中は冊子の綴りを持って近づいてきた。

「特別気になるような件数はありません。村津については皆無です。今回の異動は正解でしたね」

「そうだな」

道中の言葉に、笑みを含んだ顔でうなずいた。気になっていた村津の勤務内容にほっとした。

龍二は昼を過ぎると落ち着かなかつた。村津には余分な気を遣わなくてもいいと言つたが、言葉と気持ちとは逆であることが心の動揺でわかる。

三月に三階の会議室で、美咲の件で激論を交わした村津の言葉が、脳裏にちらついていた。

「事務長と美咲の関係を知っているんです。僕が喋れば、施設長の耳に入って、事務長はこの施設に居られなくなる。だから僕を怒らせない方がいいと思いますよ」と言われてから、村津に強く言えなくなつてしまった。

還暦を過ぎた男が、二十代の女性に恋するなんて、外から見れば滑稽に映るだろう。この先、何年生きられるというのだ。長生きしたとして三十年。健康で女性を相手できる期間は、長く見積もっても十年だ。人の目ばかり気にしているわけにはいかない。

『悔いなき人生』これが龍二のモットーなのだ。

今まで美咲との関係は、お金で繋がっていたことはわかっているが、彼女には龍二を引きつける魅力があった。若くて綺麗な二十代の女性といった、そんな単純なものではない。一緒にいけば優しさを感じ、落ち込んでいればそっと励ましてくれる。逢えば安らぎを覚え、人生の生きる活力を与えてくれる女性なのだ。

だから事務長のポストを危うくする可能性があったとしても、離れるわけにはいかない。できれば肉体関係を持てれば最高だが、無理なことはわかっている。せめてもの願望として、美咲と会って顔をつき合わせ、話をするだけでいいのだ。

施設の玄関に美咲が姿を現した。今日の髪はポニーテール。服装は白のブラウスに黒のスカート、清楚な服装がまた魅力的だ。いつものことだが、受付窓口で面会票を書き、事務所の方に軽く会釈をすると、ロビーを通り抜け入所棟に入って行く。

美咲には村津から連絡が入っているはずである。事務所に向かって会釈をしたのは、社交辞令の挨拶であつたのだろうか。彼女の一挙手一投足が気になる。

美咲が菊野の部屋を訪れてから、事務所の時計は三十分が経過していた。彼女が事務所前を通つた気配がない。それに村津は美咲に「声をかけるよう言っておく」とにやけた顔で耳打ちしてきたが、どこまで彼を信用していいのか。安易に村津の口車に乗っていくのも不安を覚える。

菊野の部屋まで行くかとも考えたが、特別な用事もない。ただ彼女と言葉を交わしたいだけである。「何かご用ですか」と聞かれたら、返事に困ってしまう。何か良い方法はないかと思案を巡らせた。龍二は受話器をあげ、伊藤相談員が携帯しているPHSの番号を呼び出した。少し鼓動が速くなっているのが感じ取れる。しばらくすると伊藤の声がした。

「北条菊野さんの部屋にお孫さんが面会に来ているはずなんですが、すまないが、『帰り事務所に声をかけてほしい』と伝言してくれないか」

「わかりました。今から菊野さんの部屋に行き、お孫さんに、帰り事務長へ声をかけるよう伝えてきます」

「よろしく頼むよ」

電話を切ったが、こんなことをしていたら、事務長が入所者の家族に色目を使っているといった噂が、施設内を駆け巡るのではないかと嫌な気分になった。

龍二は玄関付近ばかりに視線を向けていた。事務所の時計は三時を指していた。もう美咲が来てもいいはずだ。そのとき机上の電話が鳴った。ナンバーデスプレーに施設長室の内線番号が読み取れた。なんと運が悪いのだと思いつながら受話器を上げた。

「すぐに施設長室まで来てくれないか」

低音の渋い施設長の声だった。

「申し訳ありませんが、今急ぎの仕事をしていますので五時以降か明日にしてみませんか」

龍二には精一杯の抵抗だった。施設長に呼ばれたら、最低でも一時間はかかる。長ければ三時間の場合もあった。

「面会に来ている家族さんを待っているのではないのかね」

ドキンと胸が鳴る。

「どうして、それを……」

「事務長が入所者の家族に手を出しているという噂が施設内に流れていることを、君は知らないのか」

低音の渋い声が、龍二の上から覆い被さってくる。

「はあ……」

頭の中が混乱して次の言葉が出せない。

「今すぐ施設長室に来るんだ！」

「はあ……」

「はあ、はあ、だけでは何を言っているのかわからないんだ。来るのか、来ないのか。どちらなんだね。はっきりしなさい」

もう観念するしかなかった。施設長の言葉は絶対なのだ。逆らうことはできない。

「参ります…:」

そう言うって受話器を置こうとしたが、掌から吹き出した脂が受話器にまとわり付き、手から離れなかった。

龍二は事務所を出て重い足取りで、二階へ階段を一步一步踏みしめた。施設長の言い方が気になる。なぜ入所者の家族を待っていることが知られているのか。だれかがチクったのか。そうでなければ施設長が知っているはずがない。今日美咲と会うことを知っているのは村津と伊藤だけだ。二人のうちのどちらかというところか。二人とも人間関係はうまくいっていると思っっているのだが…:。 「帰り事務所に声をかけてほしい」と伝言を伊藤相談員に頼んだとき、事務所の電話からPHSにかけて。近くにいれば電話の内容は聞こえたはずだ。そんなところまで疑えば事務所の職員だって可能性はある。

思案しているうちに施設長室の前に着いた。深呼吸をしてからノックをした。「どうぞ」という声を確認してから、静かにドアを開けた。

施設長は部屋の中央に置かれているソファに座って老眼鏡を布で拭いていた。ドキッと心臓が唸った。これは苛立つ気分を押さえようとしている仕草なのだ。十年も施設長の下で仕えているとわかる。ソファの横に立って次の指示を待った。

「用事のある事務長を無理矢理呼んだのは、職務上どうしても話しておかなければならないことがあって、来てもらったわけですから、まあ座ってください」

施設長は心境を隠す丁寧な言い方で、向かいを指した。龍二はソファに腰を降ろし視線はテーブルの上に落とした。施設長は眼鏡を拭く格好をしたまま口を開かない。重苦しい空気が漂う。

「ご用件は何でしょう」

しびれを切らしたのは龍二だった。

「事務長の急ぎの用事とは何だったんですか」

じろつと大きな目の玉を向けて聞いてきた。龍二の質問を切り

返された感じだ。先ほどの電話でのやり取りで知っているはずなのに、あえて聞いてくる…：返答に困った。雲行きが怪しい雰囲気だ。まさか美咲の話はできない。いつもの施設長ではない。表情が厳しくなっている。的外れの返答はできない。小さな嘘をつけば辻褄を合わせようとして、大きな嘘をつかなければならなくなってしまう。

「入所者様の家族の方と会う約束をしていたものですから、そこらを優先させようと思っただけです」

「ほう、入所者の家族の方と。入所者はどなたですか」

今までの施設長は、こんな突っ込んだ聞き方をすることはなかった。

「北条菊野様です」

ここははつきり答えるしかない。変に隠し立てすると疑われる可能性だって考えられる。

「入所に関することは、相談員に任せておけばよいのではないですか。判断の必要な内容であれば相談課長だっている」

「…」

「わざわざ事務長が出て行かなければならない理由でも、あったということですか」

「…」

龍二は渋い声に圧迫され答えることができない。

「まあいいでしょう。話を前に進めましょう」

「…」

「事務長を呼んだのは、お願いしたいことがあるのです。私の親友が運営している認定こども園へ副園長として七月から出向してもらいたい」

施設長からの、あまりにも唐突な言葉に絶句した。

「…：どういことですか。言っておられる意味がわかりませんが」

「アフタースクール事業を助けてやってほしいのです。副園長と

して午前中は運営母体である社会福祉法人の経理を見て、午後は小学校高学年のクラス担当を受け持って、助けてやってほしい」
施設長の言っていることが理解できない。

「どうして私なんですか。経理は良いとして、アフタースクール事業でクラス担当といえ、放課後児童の世話をすることですか」

「そういうことです」

簡単にアフタースクール事業を手伝えと言うが、経験の無い素人ができる仕事ではない。それに資格が必要なはずである。『資格試験一覧』という本で見た記憶がよみがえった。

「アフタースクール事業のクラス担当といえ、保育士か教諭免許を持っていない人と、出来ないのではないですか。私には、そんな資格はありません」

意図を知ろうと、施設長の正面から顔を合わせた。

「さすが事務長だ、よく知っているね。アフタースクールの先生になる資格は放課後児童支援員認定資格が正式名だが、事務長が言ったように、保育士資格か教諭免許、または社会福祉士資格が基礎資格として必要なんだよ。そこで親友から基礎資格を持った男性職員を派遣してほしいとの依頼があつてね。事務長は社会福祉士資格を持っていたではないか」

余裕の表情で龍二に迫ってくる。ここは引き下がれない。

「資格を持っているからといって、どうして私なんですか」

どう考えても理解できないし、納得もできない。

「親友が言うのには、アフタースクールの現場では暴れん坊の児童が多いらしいんだ。口で注意したぐらいでは聞かない。特に小学校高学年クラス担当の先生は疲弊しきっている。今は体罰が禁じられている時代だ。保育士や教諭免許を持っている職員はいるのだが、ほとんどが女性職員でなかなか児童が言うことを聞かない。それで男性職員の派遣依頼となつたわけである」

「……」

「この施設で社会福祉士資格を持っている男性職員は、事務長と北田相談課長、それに伊藤相談員の三名だ。事務長職には無くてもよい資格だし……わかってくれるだろう」

わからないと言いつ返したかったが、そんなことは言えない。

「認定こども園で募集をかければ社会福祉士資格を持った男性職員が応募してくるかもわかりません。是非そうするように親友の方に言っておいてください」

少し強い口調で言い返していた。

「事務長。私の言っている意味が、まだわからないのかね」

施設長の顔色が変わった。機嫌を損ねたのはあきらかだ。

「……」

「私にそこまで言わすのかね。事務長にショックを与えないように、気を遣って話しているつもりなんだが」

「……」

「事務長は入所している北条さんの孫である美咲という女性に未練があるのかね。なかなか綺麗な方らしいが、今日も会おうとして画策していたらしいね」

「画策なんて……どうして彼女のことを知っているんですか」

「施設内の噂は私の耳に入ってくるんだ。事務長が美咲という女性と知り合いで、今でも諦めきれずに追いかけて関係を迫っているというではないか」

「そんな……関係を迫るなんて……」

「そんな噂が入所者の家族に広がったらどうなると思うんだ。施設の信用を落とすことになるし、ひいては入所希望者が減り経営収益の減収につながることになる」

「……」

「事務長は施設の幹部職員である。行動には責任を持ってもらわなくてはならないが、当然責任も負わなければならない」

「この話、断ればどうなるんですか」

「今更、何を言っているんだ。君が置かれている立場を考えなさい」

い。君の軽率な行動が、どれだけ施設に迷惑をかけているか、わからないのか」

「……」

「本来なら君を解雇してもいいんだよ。それを温情をかけて親友の認定こども園の副園長に取り立ててあげようと言っているんだ。感謝をしてほしいくらいだよ」

「出向ということは、またこの施設に戻れるということですか」

「はつきり言っておこう。出向といっても戻ることはない。君もそれなりの年齢になっている。認定こども園で、あと何年働けるかは、君の努力しだいだ」

龍二は施設長の言葉遣いが気になった。当初は龍二のことを事務長と呼んでいたが、『君』という呼び名に変わっていることが、胸の奥に突き刺さった。

龍二の行動が施設長に筒抜けで知られていたなんて、うかつだった。施設長に密告した者を突き止めたかったが、そんなことより今は自分の身の振り方を考えなければならぬ。施設長の口調から施設に残れる可能性は無理だ。そうなるかと辞めるか、新しい職場に出向するかのどちらかの選択肢しかない。

顔面が熱くなった。鼓動が速くなっているのがわかる。『短気は損気』のことわざが浮かぶ。ここは冷静に、冷静にと自分自身に言いきかす。ここで施設長を怒らせてしまえば副園長の話だつて消える。それでも施設長と直接の上下関係でなくなるといえば、何でも聞ける気がした。

「私と美咲との関係を施設長に知らせたのはだれですか」

施設長は厳つい表情を見せた。

「そんなこと言えるわけがないではないか」

「後任の事務長は誰になるんですか」

一瞬、施設長は顔をしかめた。

「そんなことは、これから考える」

何事も慎重な施設長のことだから、もう決めているのだろうと

思ったが、それ以上突っ込めない。次の言葉が思いつかなかった。『長い物には巻かれろ』のことわざがある。施設長に反抗するのは得策ではない。しかし、ここにいること自体が腹立たしい気持ちだ。

「失礼します」

そう言って龍二は席を立ち、ドアに向かった。

「七月一日から認定こども園へ出向してもらうから、そのつもりでいてください」

ノブに手をかけようとしたとき、後ろから声がした。その言葉を無視して部屋を出た。

廊下を歩きエレベーターの前を通り抜け一階への階段を降りかけた。瞬間、階段を踏み外しバランスを崩した。前のめりに倒れそうになったが階段を二段飛びに降り、何とか倒れずにすんだ。前を見て階段を降りていたつもりだったが、注意散漫になっていた。危ないところだった。こんなところで転んでケガでもしたら、いい笑いものだ。

龍二は腕時計に目をやった。五時を指していた。施設長室に二時間も居たことになる。美咲は怒っているだろう。事務所に声をかけるようにと言っておきながら、すっぽかしてしまった。原因をつくった施設長にイライラする。この施設を離れて認定こども園に出向することになると、美咲と会える機会も皆無になる。

龍二は事務所に戻った。自席に重い腰を落とすと、疲労感を覚えた。何もする気がしない。職務に励む部下たちに定まらない視線を向けた。頭の中は出向のことが渦巻いた。

「事務長が施設長室に入っておられるときに、北条美咲さんが事務所に寄ってこられました。事務長が席を立っていると伝えると帰られました」

総務課長の道中が、ニタツとした顔で声をかけてきた。

「何か、言ってなかったか」

平静を装い聞いた。道中の態度から興味本位で「美咲に会えな

くて残念でした」と言っているように窺えた。彼の今までの働きを考えると考えすぎのように思えるが、自分自身の心理状況を考えると、ここは何事にも自重しなければならぬ。

「特別何もなかったと思います」

そう言っただ道中が席から離れると、一人取り残された心境になった。この施設内で一人浮かされた感じだ。

龍二は椅子を反転させて窓の外に視線を移した。いつも見る光景が映る。施設長が言った出向を受け入れるか、拒否して辞めるかのどちらかだ。どちらにしても美咲と会うことはできなくなる。やっぱり六十歳代の男が二十歳代の女性と付き合おうと思うのが所詮無理なことなのだ。今までのハレンチな行動のツケがまわってきたのだ。

これからどうしたらいいのだろう。辞めて家に居たとして毎日何をすればいいのだ。妻とは生活に必要な最小限の言葉しか交わさない。そんな通夜のような家庭の中に毎日いなければならぬのか。会員クラブに通うにしても、ナナミのいない店では、今までのように気分が乗らない。

「お先に失礼します」

背後から声がかかった。振り返ると職員たちが帰り支度をして事務所を出て行くこうとしていた。時計を見ると退社時間になっていた。「お疲れさん」と返答した。十分ほどの間に事務所内は、今夜の当直管理人と龍二だけとなった。

龍二は机の上の書類を引き出しにしまい込んだ。重い腰を上げると当直管理人に「お願いします」と声をかけ事務所を出た。

家に帰ると、ダイニングテーブルに夕食が並んでいた。妻は冷蔵庫からビールを出しグラスに注いでくれた。龍二はおかずを肴に飲んだ。おかずは美味しかった。しかし龍二は妻の前で美味しいと一度も言ったことがない。生活費を稼いでいる亭主に妻が尽くすのは、当たり前のことだと思っっている。

静かに座って食事の相手をし、何を言っても口答えをしない妻を可愛く思うこともあるが、それを口に出さない。妻が夫に従うのは当然のことであり、感謝の気持ちなど表さずとも、文句を言わないことで妻は満足していると思っていた。

ビールを飲んで酔いが回ってくると、施設長に言われた言葉が頭の中で膨らんでくる。職場を辞めて家庭に引きこもり、妻と一緒に居るのも面白みがなく踏み切れない。認定こども園に出向するのもしやくに障る。

「施設長に、七月から認定こども園へ出向しろと言われた」
「……」

妻は顔を上げ、龍二を見ただけでまた目を伏せてしまった。

「どうなんだ。何か言いたいことはないのか」

「別に何も、あなたの好きにやればよいのではないですか」

表情を変えない妻の態度は、予想していたことだとはわかっていても、どことなしか苛立ちを覚える。

「このまま辞めてしまえば毎月の収入は無くなるし、認定こども園に出向すれば、いくらかの金にはなる。生活に関係することだから聞いているんだよ」

今まで伏し目がちだった妻が、背筋を伸ばし龍二に向き直って視線を合わせてきた。

「そんなことより、あなたにお願いがあるの……」

龍二はドキッとした。妻が毅然とした態度を見せたのは初めてだ。なんだか嫌な雰囲気だ。

「そんなことよりとは何だよ。その言い方は間違っているんじゃないのか。亭主が大事な話をしようとしてるんだ。妻として静かに聞くべきじゃないのか」

「……」

妻は目を伏せてしまった。

「はっきり言えばいいじゃないか」

龍二は、理屈っぽい言い方によって、妻が心を閉ざしてしまっ

たと思った。

「……」

妻の態度を見て何か引つかかるものを感じる。

「どうしたんだ。言えよ！」

龍二は口では強気の発言をしていたが、不安が膨らんでくる。残り少ない人生に妻が付いてきてくれるのだろうか。上から目線で喋り何事にも反発を許さず、力で押さえ込んできたことが、いつかは爆発しないか。心配事として返ってきそうな気がする。

龍二の言うがままに耐え、炊事洗濯をこなしている妻に、内心は感謝をしていた。しかし、それを口や態度に表せない。それが昭和の人間だと言ってしまったえばそれまでだが、時代が平成、令和と変わっているのに、龍二自身が変わらなければ時代に取り残されてしまうのはわかっていた。戦前生まれの父親の姿を見て、その姿を六十年余り取り込んできた生活習慣が染みついてしまっていた。

妻は突然立ち上がると、キッチンボードの引き出しから家計簿を取り出し、挟んでいた一枚の用紙をテーブルの上に置こうとしていた。

龍二は目を背け反射的に席を立ち上がり、席を蹴りリビングのソファに移動した。一枚の紙を見るのが怖かった。妻が離婚届の用紙を出したと思った。女が追い詰められた態度で、勇気を振り絞って迫ってくるのは離婚しかない。「俺は認めない。認めてたまるものか」龍二は胸の奥で固く誓った。

六十年余りの人生何のために頑張ってきたのか。退職後は人生を有意義に過ごそうと思っていた。妻と一緒に海外旅行もいいたい。グルメ旅行もいいたろう。ほしい物があれば何でも買ってやる。そんなことをぼんやりと考えてきた。今、妻に捨てられれば、どう生活していけばいいのだ。炊事はできない。洗濯はできない。できない尽くしの男に、どうして一人で生きていけたいのか。

「あなた、こちらに来てください」

隣のダイニングテーブルの前に座っていた妻から声がかかる。いつもの柔らかい遠慮がちな声と違う。今まで経験したことのない切り込んでくるような圧迫感がある。

頭の中が混乱した。こんな状況では妻と話ができない。それも今後の一生を左右する話なんかできるわけがない。

「今日は疲れた。もう寝る」

龍二は立ち上がるとリビングを出て二階に上がり、自室に閉じこもった。妻とは寝室は別にしていて。ベッドに横になったが、やきもきする気持ちが胸いっぱい広がった。どうして離婚という話になってしまったのか。妻が出した一枚の用紙が離婚届だったのだろうか。今まで見たことのない妻の厳しい表情から、その可能性は大きい。

会話が途絶えた家の中は静かだ。しばらくして、ゆっくり階段を上がってくる妻の足音が聞こえる。階段を上りきると隣の部屋のドアが開き、閉まる音がした。龍二は眠れそうになかった。ダイニングで妻が出そうとしていた用紙が気になる。

悪いことは重なるものだ。職場では施設長から認定こども園への出向を命じられ、家では妻に心を癒やしてもらおうと思っていたのに、逆に離婚と思われる話をされるなんて、最悪の状況だ。

龍二は聞き耳を立てた。妻の部屋から音は聞こえない。眠ったようだ。ゆっくり起きあがり、音をたてないように静かにドアを開け部屋を出た。忍び足で妻の部屋の前を通り、電灯を灯さず暗がりの階段を手すりに手をかけて下りた。

真つ暗な一階のダイニングに入ると電灯を灯す。急に辺りが明るくなり目がくらんだ。音を立てないように、静かにキッチンボードの引き出しから家計簿を取り出し、ダイニングテーブルに置いた。数時間前、妻は確かに会計簿に挟んでいた用紙を取り出そうとしていた。

家計簿に目を通しページを一枚一枚めくる。食料品店の特売チ

ラシが挟まっている。「家計を安くあげようと努力していたのか」そんな言葉が頭に浮かぶ。家計簿には毎日の支出が記録され、主な買い物は食料品であることがわかる。ページに買い物のレシートが貼り付けられていた。今月分はまだ整理ができていないのか、レシートや領収書が貼られず挟まったままになっている。妻が家計を几帳面に記入していることに感心した。妻が出そうとしていた用紙を探さなくてはと、ページを速くめくる。メモ書きは出てくるが離婚届は出てこない。家計の記録が書かれていない来月以降も見たが見当たらない。

あの用紙は離婚届ではなかったのか。どこか違うところに入れたのではと、落ち着かなかった。しかし深夜に他の場所を探す気にはなれない。妻が起きてくればどう言い訳をすればいいのか。龍二は手早く家計簿をキッチンボードに戻し、電灯を消し寝室に戻った。

ベッドに横になっても、神経が興奮しているのか、なかなか寝付かれない。どうせ眠れないのならば、今後妻へどうするべきか考えた。しかし妙案は浮かばない。ここは静観して妻の出方を待つか……。そんなことを考えているうちに、いつしか眠ってしまった。

あくる朝、起きてダイニングに行くと、妻が朝食の用意をしていた。室内の空気が重苦しい。黙っているのも昨夜の出来事を引きずるようなので、思い切って「おはよう」と声をかけ、返事を聞かずに、玄関へ新聞を取りに行った。リビングで新聞を広げ、妻の様子を窺ったが、何も言っただけだった。少し安堵した。

昨夜話しかけた、認定こども園への出向問題は中途半端になっていたが、話題にすまいと思った。冷静になれば、妻の意見を聞かなくてもわかりきっている。今の仕事を辞めてしまうよりか、認定こども園で働く方が良いのに決まっている。いくらかの収入によって生活費が助かる。

龍二が働こうと思う気持ちに傾いた理由は、もう一つあった。

それは昨夜見せた妻の態度である。一步も引こうとしない圧迫感が読み取れた。何か重大な決意をしているのは確かなようだ。家庭内別居か、または離婚の意思を感じ取った。そうなれば家庭崩壊である。離婚となれば仕事から家に帰ってきてもだれも居ない。家の中は真つ暗で寒々とした部屋の電灯を点け、自分で食事や風呂の用意をしなければならぬ。そんな毎日が続くのである。考えれば考えるほど寒気がする。

脳裏に『短期は損気』の言葉がよみがえる。意味をじっくりと噛みしめた。短気を起こして事にあたっても、結局は失敗して損になるばかりだということ。ここは妻に強気に出て離婚か又は家庭内別居をされても困る。ここは忍の一字だ。

外に出て働いている方が気分的に楽である。働かずに家に居たとしたら、毎日妻と顔を合わせなくてはならない。そうなれば口喧嘩になる可能性だって、十分に考えられる。

自分の年齢を考えると、今更ハローワークに行つて職探しをするのも面倒くさい。今日出勤したときに、施設長へ認定こども園出向の承諾を伝えようと思った。

七月一日に認定こども園へ赴任した。建物は鉄筋コンクリート二階建てで、同じ敷地内に併設する鉄骨造平屋建てのアフタースクール棟が建っていた。事務所は合同で認定こども園の建物の一階にあった。

事務所のガラス戸を開け「こんにちは、松崎と申します」と声をかけると、入り口付近に置いてあるソファに座っていた七十代と思われる男性が、立ち上がり声をかけてきた。

「待っております。私はこの認定こども園の運営母体である社会福祉法人で理事長をしております北山と申します。まあ中へどうぞ」

そう言つて満面に笑みを湛えソファを勧めた。龍二は一礼をして男性と向き合つて腰をおろした。

「この度はご無理を言って申し訳ありません。松崎さんが勤めておられた特養の施設長さんとは、昔からの知り合いで、これまでもいろいろ施設運営についての相談など、お世話になってるんですよ。だいたいのことは施設長さんからお聞きになっていると思いますが、アフタースクールもいろいろ大変で、小学校の高学年になると乱暴な男の子もいて、なかなか女性の先生では押さえが効かないもので……、それで松崎さんが勤められていた施設長さんに、資格ある男性の適任者はいないかと相談したんです。そしたら松崎さんを紹介いただいたわけです。いやあ、助かりました。事務長をされていた優秀な先生を紹介していただけるなんて、ありがたいです」

男性はにこやかな雰囲気醸し出す表情をしていた。持ち上げる言い方をされて気持ちが和らいだ。胸の片隅には施設長から頼まれて、認定こども園が龍二をいやいや受け入れたのではないかとの思いがあつた。

「施設長から概要は聞いておりますが、具体的には……」
気持ちが先走って質問をしてしまった。

「松崎さんには、認定こども園の副園長として午前中は主に経理を監督していただき、午後はアフターの高学年クラスを担当しながら、アフタースクール事業を見ていただきたいのです。経理は事務職員がいますので、事務量はほとんどありません。資金収支計算書などをチェックして運営状況を私に報告してください。アフターも女性職員がいますので事務的な業務はありません。乱暴な男子児童に睨みを効かせてもらえれば、それでいいのです」

龍二は肩の荷が少し軽くなり、息を吐き出した。そのときだつた。横から「ご苦労様です」と声がして、テーブルにコーヒーが置かれた。

「はあ、どうも」と返事をしてから、声の方に視線を向けると小綺麗な四十歳代くらいの女性が立っていた。どことなしか北条美咲に似ている。二十代の頃はもっと綺麗であつたのだろうと思っ

た。

「認定こども園とアフタースクールの園長を兼務している北山です」

北山理事長は立っている女性を指して紹介した。

女性は「よろしくお願ひします」と言っで一礼した。

龍二は急いで立ち上がり、「お世話になります。こちらこそよろしくお願ひします」と言った。

「園長は私の娘です。これから認定こども園事業と、アフタースクール事業を助けてやってください。私は会社に戻りますが、すべて園長にまかせております。これからは二人で相談して事業を進めていってください」

北山理事長はそう言っ、立ち上がりかけた。龍二は素早く立ち上がり、「精一杯頑張ります」そう言っ頭を下げた。園長は理事長が事務所を出るのを見届けてから、向かいのソファに座った。

「理事長は会社に戻ると言われましたが、会社を経営されているんですか」

「はい、小さな会社ですが卸業をしています。合間を見て毎週一回は寄ってきます」

園長は施設の概要を説明してくれた。土地と建物は市の所有物で、認定こども園事業とアフタースクール事業を市から社会福祉法人が委託を受けて、公設民営方式で運営しているとのことだった。園長のてきぱきと無駄のない喋り方に感心した。気性も強そうに感じる。話をしているときは龍二から視線をそらさなかった。「松崎さんさえよければ、今日から仕事をお願ひします。アフターの先生方への紹介は、皆さんが揃う昼からになります。午前中は事務的なことをしていただき、午後はアフタースクールのクラス担当をお願いします」

そう言っ園長は立ち上がり、事務所の奥で経理事務をしていた女子職員に龍二を紹介した。

「今日から来ていただくことになった副園長の松崎さんです」
園長から副園長という職名で紹介されても、実感がわかなかつた。午前中は経理に目を通した。社会福祉法人なので税金はかからない。黒字で運営され、堅実な経営であった。

問題は午後からのアフタースクールである。園長から行程表を見せられた。隣の小学校から子どもたちが、午後三時頃に帰ってくる、手洗い、うがいを行い、おやつを食べる。各自宿題を始め、先生はそれを見ていて、質問があれば教えてあげる。宿題が終われば、運動場で外遊び。先生は喧嘩をしていないか、危険な遊びをしていないか見守る。時間が来れば部屋のの中に入れて、保護者が迎えに来るまでゲームなどの中遊び。仕事の関係で迎えが遅くなる保護者もいて、子どもたちが帰り終わるのは午後七時になる。先生たちは時差出勤で業務に当たる。園長の説明に不安もあったが、ここまで来ればやるしかない、割り切ることにした。

午後三時に園長と一緒に担当のクラスに入った。小学生四、五年生の合同で三十名クラスだった。

「今日から、このクラスを担当する松崎先生です。皆さんよろしくお願いします。先生の話をよく聞いて、また指導に従って明るい楽しいクラスにしてください」

園長に続いて龍二が担当就任の挨拶を行った。

「松崎です。よろしくお願いします。園長が言われたように、明るい楽しいクラスを目指して、頑張っていきたいと思えます……」
龍二が挨拶をしていると、子どもたちは横を向いたり、友だち同士の話し声が出た。静かに聞いている態度ではなかった。

「静かにしなさい！ 松崎先生の方を見て！」

突然、横から園長の金切り声が飛んだ。龍二はビクツとして声が止まってしまった。園長の取り澄ました小綺麗な顔から、高く張り上げた鋭い声が出るなんて想像もできなかった。子どもたち以上に驚いた。

初めてのクラス担当であったが、子どもたちは龍二の様子を窺

う感じだった。『先生』と呼ばれ、これなら何とか勤められそうだと気持ちや和らいだ。

一週間ほどして龍二に慣れてくると、宿題を行う勉強の間でも、雑談が増え騒がしくなってきた。青山君がガキ大将のリーダー格で、動き回ったり、他の児童との私語が見受けられる。何回も「静かに!」、 「席を立つな!」と言っても聞かない。尻でも叩いてやろうかと思うが、今の時代なかなか出来ない。叩く仕草でもしたなら、青山君の方から、「暴力はあかんねんで」とか「パワハラや」と言ってくる。男の子だけでなく、女の子だって口答えをする。肩をスキンシップと思い、軽く触ろうものなら、「セクハラ!」と言って睨み付けてくる。

龍二が小学生時代に先生と接していた感じとは大きく違っていた。先生とは聖職で、先生の言葉は絶対だった。言うことを聞かなければ、叩かれることも度々あった。宿題を忘れると叱られたり、教室の後ろに立たされたりした。だから先生は怖い存在であり反抗的な口答えはしなかった。

担当しているクラスの児童は少し違った。叩くことや罰を与えることを、教育委員会が禁じているのを、親から聞かされているのだろう。「先生に何かされたら、教育委員会に訴えたらいいねん」という言葉が、子どもたちの中から聞かれた。

勤務が一ヶ月過ぎた頃、龍二は放課後児童支援員認定資格研修に行かせてもらい、子どもたちに対応する自信が、徐々に膨らんできたのを自覚した。

そんなある日、青山君が宿題の時間に部屋の中で走り回り、何か注意したが止めなかった。みんなの前で取り押さえ首筋を少し締めあげた。痛かったのか顔をしかめていた。少しやり過ぎたかと思っただが、子どもたちに先生の威厳を示し、騒げばこうなることを見せる必要があると思っただ。

次の日の夕方だった。龍二は他の先生から聞いて、青山君の母親が園長に面会を求めて来ていることを知った。母親が帰った後、

園長から呼ばれた。事務室のソファに園長と対面で座らせられた。「先ほど青山君のお母さんが来られました。なぜ来られたか、先生は心当たりがありますか」

園長は龍二の顔を見て視線をはずさない。

「はあ……」

龍二は迷った。昨日の出来事を言っていると思うのだが、万一違っていたら、昨日のことを知られることになる。龍二の煮え切らない態度を見て、園長は話を進めてきた。

「お母さんは、松崎先生の仕事態度を聞いてこられました。私は穏やかな責任感のある先生であると答えましたが、お母さんは納得されなかったようです。『松崎先生のクラスを見ておられますか』と問い返されたので、見ていませんが、社会福祉士の資格があり放課後児童支援員認定資格研修も終了された先生です。信頼して青山君の四、五年生クラスを担当させていますと答えました」

「……」

視線をそらさない園長の言葉を、黙って聞くしかなかった。

「青山君の首筋に跡形があると行って、昨夜のうちにスマホで撮った跡形を見せてくれました。先生は心当たりありますか」

園長の言葉が、ズシッと腹の底にねじ込まれていく。

「クラスの中を騒いで走り回るので、取り押さえて肩のところを強く握ったのは事実です」

喋ってから、園長の態度を見ていた。叱責を受けるのではないかと、一抹の不安を覚えた。

「そうですね。スマホの写真を見せられたのですが、微かな跡形がある程度でした。青山君のお母さんも少し問題のある方で、いろいろ苦情を言ってきます。自分の思うようにならないければ教育委員会にも電話をする方です。言われていることを百パーセント信用していませんが、何らかの返答をしなければなりません。『松崎先生に確認します』、と言って帰ってもらいました」

園長は静かな表情を崩さなかった。何らかの厳しい言葉がある

のだろうと覚悟をしたが、園長は考え込んだ様子で、何も語ろうとしない。強ばった表情にも受け取れた。二人の間にしばらく沈黙が続いた。龍二は怒らない園長を見て安堵していた気持ちだが、沈黙が長くなるにつれて、重圧に変わってきた。

年上の龍二を気遣って、叱責するのを止めたのだろうか。園長は青山君の母親に『穏やかな責任感のある先生』と龍二のことを良い先生と答えてくれた。そんなことを考えると、龍二が原因で問題を起こしておきながら、その尻拭いを園長にさせるのは、心苦しい気がした。

社会福祉法人だといっても、アフタースクール事業は、教育委員会から委託を受けてやっている事業である。教育委員会へ訴えられれば、調査権は教育委員会にあり、行ったことが体罰と認定されれば、龍二自身の処分だけでは済まない。管理者である認定こども園の園長が、ひいては運営母体の社会福祉法人の理事長が責任を負わなければならない。話が大きくなっていく。

つい先日の新聞に書かれていたことが思い出された。近隣のA市教育委員会で、適応教室指導員として勤める非常勤職員の元小学校長が、指導を聞かず口答えする男子小学生を叩きケガをさせて体罰容疑で逮捕され、懲戒処分になっていたのだ。

「謝罪します」

龍二の口から言葉が飛び出していた。園長の表情が一瞬緩んだように思えた。

「青山君のお母さんに謝罪します」

龍二は呼吸を整えて再度言った。美咲に似た園長に嫌われることは、認定こども園に居づらくなる。そう考えれば、だれにだつて頭を下げられる。

「そうですか。わかりました。謝罪をお願いします」

園長の冷静な表情を見ると、美咲と重なってくる。心が緩むと、園長を上司ではなく、女として見てしまいそうである。

龍二は母親に謝罪をしようと思っていたが、青山君の迎えはい

つも祖母が来ていた。たまに来るが、すれ違いでなかなか会うことができない。謝罪をあまり先送りすることも得策でないと思い、入所申請書を見て住所を調べた。家を訪問したが留守で母親に会うことができなかった。

そんな折、龍二が振り替えて休んでいる日に、青山君の母親が来て園長と会っていたことを、同僚の先生から聞いた。

夕方になると、保護者の迎えがあり、ポツポツと子どもの数が減っていく。合間を見て事務所で担当クラスの保育日誌を書こうとしていると、園長が入ってきた。

「松崎先生、ちよつといいですか」と声をかけられ、先日の園長と青山君の母親との会話を聞かされた。

母親は教育委員会への訴えをほめかしたとのことだった。園長はとっさの判断で、「今回あった出来事は、松崎先生も反省し謝罪すると言って、先日、青山様の自宅を訪問したのですが留守だったと報告を受けています。またこの件は職員間で情報を共有することになりますので、全職員に知らせております」そう伝え、母親の態度が一変したという。

母親は今回の出来事を、握り潰されてしまうのではないかと、思っていたのだろう。それを龍二が青山宅を訪問して謝罪をしようとした態度と、内容を職員全員に周知したことによって、龍二の立場が苦しくなると思い、気が晴れたらしい。龍二に異論はなかった。自分がやらかした出来事を立場上とはいえ、園長が対応し処理をしてくれようとしているのだ。感謝したい気持ちだった。

「園長、青山君の件では気を遣わせて済みませんでした」

龍二は立ち上がり頭を下げた。

「小さな事でも、文句を言われる保護者もおられますから、普段から保護者とのコミュニケーションを取るようにはしてください。迎えに来られたときに、世間話などして人間関係を作っておくことも大事なことです。また間違いを起こしてしまったときは、保護者に内容を早く説明し、非があるときは詫びることです。以後

は気をつけてください」

園長のスパツとした言葉が身に染みこんだ。やはり現場の責任者であるだけに、保護者から苦情を言われても動じている様子はなかった。

「わかりました。そのように心がけます」

そう言って再度頭を下げた。ここは下手に出るしかない。『郷に入っては郷に従え』である。先輩の言うことに従うことが自分を護ることになる。

認定こども園で働き出してから二ヶ月が経つ。青山君は相変わらず、部屋中を走り回ったり、友だちとふざけあつたりしている。龍二が注意をして少し静かになったと思っても、しばらくするとトイレに行ったりして落ち着かない。宿題をする勉強の時間などに支障がでてくる。青山君は母親に謝罪をした経緯があり、実力行使をして揉めたくはなかった。

「静かに！」

龍二は大きな声を張り上げた。園長の高く張り上げた鋭い声までいかないが、努力するしかない。すべての子どもたちが扱いにくい訳ではないが、一部の児童によってクラスの中をかき回されているのが実情である。何回も大きな声で注意をしていると、喉が痛くなる。

苦情を言われなかったために、迎えのときに、今日あつた子どももの出来事やクラスでの取り組み状況など、保護者に説明し、コミュニケーションを取らなければならないのも一苦勞である。

ある日、子どもたちが登所する前に、便座に座って用を足している、隣の女子トイレから先生同士の話し声が聞こえた。

「ねえ、どう思う。松崎先生。子どもたちになめられていると思わない」

「そうねえ、子どもたちに顔色が変わるくらい怒鳴っているけど、言うこと聞かないって感じね」

「青山君にやったみたいに、また暴力を振るうんじゃない。松崎

先生だったら言うこと聞かなければ、力尽くで押さえ込もうとするんだから、最低！」

「先生の経験が浅いからよ」

「園長も松崎先生に甘いわよね。青山君の件だって、もっとビシツと言ってやればいいのに」

「どこかの老人ホームから雇ってほしいと、理事長が頼まれたらしいわよ。だから園長は松崎先生に気を遣っているのよ」

「私、あんなタイプ嫌い！」

そう言い残して、二人はトイレから出て行った。

龍二はしばらくの間、男子トイレから出られなかった。今の話で何だか気分が悪くなった。それでも先生たちの噂話を聞いたか라고言つて、どうすることも出来ない。気持ちを切り替え、ただ頑張るしかないと思つた。

今日も夕方に、龍二は合間を見て保育日誌を書き始めた。

『○月○日水曜日、晴れ。四、五年生、午後三時、一斉に登所してくる。手洗い、うがい、連絡帳の提出を促す。うがいコップを投げたりして遊ぶ児童。すぐに行動に移さない者もいて注意をする。全員着席させてからおやつ時間。席を立つ児童がいたので注意。続いて宿題をさせる。いつものことだが雑談が聞こえる。ここで注意。宿題のわからない児童がいたので教える。宿題のできた児童から、危険な遊びをしないようにと言ひ聞かせ、運動場に出して外遊びをさせる。午後五時に部屋の中に入れて中遊びをさせながら保護者の迎えを待つ』

読み返して吹き出しそうになる。毎日の出来事を書いているだけの小学生並みの単純な文章。それに何かあれば『注意』の連発である。こんな保育日誌の内容に意味があるのだろうかと思う。もっと児童の名前を入れて支援員としての心理状況を書いてもいいのだが、保育日誌は月ごとにまとめて、コピーを教育委員会に提出している。いろんな人の目に触れるために児童の名前を書くことに気を遣う。そんなことを考えると当たり前障りのない文章に

なってしまう。

アフタースクール事業の職員は補助員も含めると十名で、龍二以外すべて女性だった。職員会議を行っても重箱の隅を楊枝でほじくる意見が多く、アバウトな考えを持つ龍二とは意見が合わなかった。それでも女性職員たちは先輩である。気苦労がいろいろあるのでできない職場だが、調子を合わせるしかない。それに気を遣ってくれる園長のためにも、踏ん張らなければと思う。

事務所の窓から見える校庭の広葉樹が夕闇の中で黄色くなってきたのがわかる。ここに来てから三ヶ月が経つ。特別養護老人ホームで働いていたときのことが、遠い過去の出来事に思えてくる。北条美咲の顔を思い出すと心が侘しくなる。以前は祖母が入所している施設の事務長という肩書きがあり、気楽に声をかけることができたが、認定こども園の副園長という肩書きでは美咲との繋がりが無い。まさか四十歳も年上の男が紀州のドンファンでもあるまいし、愛の告白をすることは常識から考えてもできない。それに家庭のある男がそんなことをすれば、社会から抹殺されてしまう。

午前中、事務所で経理の帳簿を見ていると携帯が鳴った。特別養護老人ホームの道中総務課長からであった。

「どうされていますか。頑張っておられますか」

携帯から聞こえる通り一遍の挨拶言葉であったが、聞き慣れた声に安らぎを覚えた。

「なんとかやっているよ」

龍二は高いトーンで空元気と思える声を出していた。

「連絡した要件は、給与六月分までの源泉徴収票を自宅に郵送しますので、確定申告に使用してください。それだけです。また施設に寄ってください」

事務的な口調で喋っている道中は、話が終われば携帯を切ってしまうそうである。この連絡を事務的な用件だけで終わらせたくない。せっかく道中からのチャンスをなんとか生かしたい。

「用件はわかった。それより総務課長、今夜久しぶりに一杯飲まないか」

「いいですよ。積もる話もありますし……」

道中の意味ありげな言葉に心が揺れた。市内の中心部にある居酒屋で会うことになった。彼は酒が好きな方である。酔えば口が軽くなる。施設内での出来事を知りたい。特に美咲のことを何か聞き出せるかと思うと、今夜が待ち遠しかった。

女性職員の多い認定こども園では、同僚と酒を飲んでストレスを発散する機会もない。離れてみれば特別養護老人ホームが懐かしく思えてくる。

業務を他の先生に任せ、いつもより早く帰り支度をする。妻に今夜居酒屋で道中と会ってお酒を飲むことを連絡した。今までは帰りが遅くなることを、いちいち連絡はしていなかったが、妻から離婚要求と思われる行動を取られてから、龍二は妻に対して感情的にさせないように控えめに接してきた。その結果なのか妻から離婚に関する話は出ていない。しかしわからない。世の中では熟年離婚が増えていると聞く。家庭に爆弾を抱えている心境だが、今の妻の態度を見ていると一安心だ。

妻と仲良くしていくには、美咲のことを諦めるのが一番だが、なかなか踏ん切りが付かない。それに異性に興味をなくせば残りの人生が灰色に思えてくる。男の身勝手な考えであることはわかっていた。

市内にある居酒屋で龍二は道中と会った。まだ時間が早いのか店内には人影は少なかった。彼とは三ヶ月ぶりだが、もつと長く会っていない旧友との関係に思えた。まずは生ビールで久しぶりの再会を祝して乾杯をした。ジョッキが打ち合う音が鈍く響いた。

「施設の運営は順調かな」

龍二は美咲のことを真っ先に聞きたかったが、気持ちを抑えた。

「そうですね。介護保険法に基づいての運営ですから、定員分入

所していますので大丈夫です」

道中はリラックスするようになり、ネクタイを緩めながら答えた。

「事務長は誰がやっているの？」

施設長が誰を指名したのか気になった。もう龍二には直接関係ないことだが、話の流れの中で聞いておこうと思った。

「僕なんですよ……施設長に無理矢理頼まれて……断ったんですが押しつけられてしまって……」

道中の態度がどこもなく、言葉も言い訳じみていた。そんな態度を見ていると、余分なことを聞いてしまった思いがする。

「それは良かった。私が施設長だったら、やっぱり君にするよ。それに君が事務長だったら連絡もしやすい。また施設に寄ったときはコーヒーマグ一杯ぐらい入れてくれよ」

「コーヒーマグぐらいは当然です。理事会や評議員会の段取りの仕方も聞きたいので、是非寄ってください」

そう言ってまだ半分入っている生ビールのジョッキを近づけてきた。龍二も六分ほど残っているジョッキを手を持つ。ガチャンとジョッキの当たる音がする。そして残ったビールをお互い一気に飲む。

「入所している北条菊野さんは元気であるかな。そうだとお孫さんだったかな、面会に来ている？」

道中が美咲に対する思いをどこまで知っているかわからないが、一般論的な言い方をわざとした。

「そうですね、二週間に一回は来ていると思います。そうだと、この前来たときに、たまたま事務所に施設長がおられて、北条菊野さんのお孫さんである美咲さんを見かけて、『綺麗な人だね』と言われ、ロビーまで出て行き、彼女を呼び止められていました。それから菊野さんの入所状況を説明したいと言って、施設長室でいろいろ話されていたようでした」

苦笑を浮かべた道中の言葉の中には、龍二が居なくなった施設で、美咲に対して何らかの物事が進んでいる気がした。

施設長は精神科医で話し方がうまい。菊野の話を話題にし、美咲の心に入り込んでいくことだって可能だ。若い頃は女遊びもしていたと聞く。熟練で経験豊富な男を相手に若い美咲が対等に話ができるとは思えない。それに祖母の菊野を施設で預かってもらっている負い目もある。そこを施設長が突いていくことだって考えられる。できることなら施設に戻って阻止をしたい気持ちだが、ふつふつと沸いてくる。

「どうされました。何か気になることでも？」

下向きで思案顔の龍二を道中が覗き込んでくる。

「いや、職員配置の欠員はないのかな」

龍二は道中と会話をする中で、事務長当時の上下関係のある喋り方をしてしまうのが少し気になる。それに彼が気を遣って敬語を使うことに気後れがした。対等の気持ちで喋らなければと自分に言い聞かせた。

「やっぱり介護職員が、正規で二、三名ほしいですが、今のままでもなんとかまわれます。だれか働きに来られる人でもいますか」
「いや…：状況を聞いたただけだよ」

龍二は一瞬言葉に詰まった。なぜ自分が求人のことを聞いたのだろうかと考えた。とっさに話の流れの中で出た言葉だが、自身が施設に戻りたい意識が脳裏にあったのではないか。今の環境は孤島に流され、ただ置かれていく感じだ。

「生ビールの、おかわりをしませんか」

道中のかけ声で、テーブルのジョッキに視線をやると空になっていた。龍二は「おう」とうなずき、カウンターに向かって空のジョッキを突き上げおかわりを催促し、天ぷらの盛り合わせも一緒に頼んだ。少し騒がしいと思って周囲を見渡すと、客が増えていた。意味ありげな表情で道中が顔を近づけてきた。それにつられるように龍二も顔を寄せた。

「これから美咲さんが施設に来られたら、様子を見て連絡しましょうか」

予期していなかった言葉である。龍二は返事に迷った。それでも一番聞きたかったことである。ぐらぐらと心が動く。道中がどこまで龍二の美咲に対する気持ちを知っているのか。そんなことを思うと返事の言葉が浮かばない。新たにきた目の前の生ビールを一口飲んだ。

「事務長……いや松崎さんが施設におられたとき。美咲さんに対する態度を見ていたら、だいたいの想像はつきましたよ。そうそう施設長も美咲さんには興味を持ったみたいですよ。この前、彼女が帰るときロビーまで降りてきて、にやにやとした顔して見送っていました。何か下心を感じましたね」

淡々と喋る道中の言葉の一つ一つがずっしりと、龍二の胸の中に重くのしかかってくる。気持ちがち落ち込んでいくのがわかる。ちようどそのとき、天ぷらの盛り合わせが運ばれてきた。話を聞かれないよう店員が席を離れるのを待った。

「道中事務長に見抜かれていたとは少し驚いたな……まあ、久しぶりだし、じっくり飲もうや」

龍二は、美咲のことを知られていた照れくささを隠すように言った。「知らせてくれないか、頼むよ」と、喉元まで言葉が出そうになったが、声にならない。家庭がある六十代の男が、二十代の女性を追いかける不条理なことを胸を張って頼めるわけがない。それに今はアフタースクールで、小学生に宿題を教えている支援員である。女性職員が多い職場に知られたら、軽蔑の眼で見られ仕事がやりにくくなるのは明白だ。

「大袈裟な言い方に聞こえるかもしれませんが、松崎さんの生き方に普段から感心していたんですよ。そうでしょう。四十歳も年下の女性に興味をもって動いている。なかなかできることではありません。やっぱり男は何歳になっても異性に興味を持っていないれば老けてしまいますよ。僕も見習おうと思っています。決してこれは冗談や面白がって言っているわけではありません。僕も五十五歳になりました。先が見えてきました。元気で生きられ

る健康年数はあと二十年くらいです。家庭に縛られて人生を終わるなんてまっぴらです。充実した納得できる人生を送りたいんです」

顔がうっすらと赤くなってきた道中は、真面目な顔つきで唾を飛ばしながら力説した。彼の言葉を聞きながら、そんなことを考えていたことに驚いた。それに美咲のことを知らせると言ってくれた言葉が、冗談ではなく本気であることを知り、道中に頼もうとする気持ちに傾いた。

「ちよつと照れくさいが、やっぱり頼もうか」

「わかりました。了解です」

道中は酔いがまわってきたのか、掌を顔の横に揚げ敬礼をした。面白がっているように見えたが、そんなことは気にならなかった。龍二には美咲の直近の情報が得られれば、形なんかどうでもよい。彼のおどけた姿を見て頼りない思いであったが、ここは道中を信用するしかない。

ほろ酔い機嫌で家に帰ると、家の中の灯が消えていた。妻が居るはずなのに、先に寝たのだろうかと思いつながら、玄関ドアのカギ穴にキーを差し込んだ。リビングの電灯を点けると、一枚の紙がテーブルの上に置かれていた。手に取るとそれは離婚届の用紙だった。全身の脱力感を覚えた。もう離婚話は終わったものだと思いついでいた。二階に上がり妻の部屋を覗いたが人の気配はなかった。離婚届の用紙には妻の名前が書かれ押印がされていた。

妻の行き先は実家であることは想像ができた。この頃は妻に対して低姿勢で対応してきたはずである。なるべくアフタースクールでの出来事を話し、雰囲気作りに努めた。帰る時間が遅くなるときや、夕食が要らないときは携帯で連絡もした。自分なりに妻の機嫌を損なわないように努力してきたつもりである。それがこの結果なのか。

そんなことを考えると、どつと疲れが出てくると同時に憤りが

湧いてきた。勝手にしろという気持ちだ。「家を出て行きたいなら出て行け、迎えになんか行かない！」と自然に龍二の口から言葉が飛び出した。

——俺の人生は何だったんだ。四十年あまり毎日働いて給料を家に運び、娘を大きくして嫁がせ、やっと一息ついたら、妻から離婚届を突きつけられる。俺が何をしたというのだ。おまえに優しくしなかったのが悪いのか。旅行に連れて行かなかったのがいけないのか。頭ごなしに怒鳴るのが気に入らないのか。俺だって言いたいことは山ほどあるんだ。たまには夫婦関係を結びたかったが、おまえは寝室を別々にして夜の関係を絶ってしまった。それに俺の理想は妻に着物を着せて毎日玄關で正座をし、三つ指をつけて「行つてらっしゃい」と言つてほしかった。そして帰つてくれば、朝と同じように着物姿での迎えを望んでいた。しかし言えなかった。おまえが嫌な顔をするのがわかっていたからだ。それだけ普段から気を遣つて接しているのだ。最近では、おまえの顔を窺い、日常話をして機嫌を取り、食事のときも「美味しい」の言葉を出すようにした。そんな俺の気持ちもわからず、毎日表情を変えないおまえの能面顔を見ていたら、苛立ちを覚えるんだよ。人生は一回きりなのだ。理想を追い求め夢を見てもいいのではないか。それを百歩譲つて、妻に着物を着せる理想を取りやめ、夜の関係を俺は耐え忍んでいるんだ。それをおまえは離婚によつて壊そうとしてるのだ。俺の努力をどうしてわかつてくれないのだ。これ以上おまえの気に入る人間にはなれない。六十数年の人生で身に染みついた性格は変えられないのだ——

妻が実家に帰つてしまつてから、食事は外食やコンビニ弁当で済ませることはできたが、洗濯はそうはいかない。洗濯機の説明書を見て使い方を覚え、寝る前に動かし、リビングにロープを張つて洗濯物を干した。そんな悪戦苦闘をしていた龍二に道中から携帯に連絡があったのは、居酒屋で会つてから、一ヶ月が経つて

いた。

「松崎さん、どうも施設長と美咲さんとの関係、何だか怪しいですよ。彼女が北条菊野さんと面会した後、施設長室に行っているんですよ。それも、今まで月二回の面会であったのが、月三回に増えました。そのとき、必ず施設長室に寄って一時間ほど話をされています。それと北条菊野さんが四人部屋から個室に移られました。原因を介護課の職員に聞いたら、施設長の指示だそうです」
携帯から聞こえる道中の声に、身体全体が萎縮していく。

「了解、また連絡を頼むよ」

冷静を装った声を出して携帯の電源を切った。気持ちが落ちこんだ。このまま何もしなければ施設長に彼女を奪われてしまう。心の閉塞感を覚え、イライラする。こんな気持ちになるのだったら、道中に美咲の情報提供を依頼するのではなかったと後悔の念が湧き出てくる。

悩んだ末に施設長と会うことにした。まさか美咲について話があるとは言えない。事前にアポイントを取ろうとすれば、拒否されることも考えられる。施設長職だから、ほとんど施設にいるはずである。

龍二は施設にいつ行こうか迷う。いざ行こうと思うと、施設長に立ち向かう勇気が萎んでなかなか踏ん切りがつかない。それに施設長に会って美咲の話を、どう切り出せばいいのか。「美咲さんと仲良くしないでほしい」、「俺の女を取るな」なんて単刀直入に言えない。敬語を使って丁寧に話したら、口のうまい施設長にやり込められてしまいそうである。こんな中途半端な気持ちでいることに、毎日が苦痛だ。

今日もアフタースクールで子どもたちの宿題を見ていた。そんなときだった。ズボンのポケットに入れていた携帯が鳴った。ディスプレイに道中の文字が出ていた。

「松崎さんですか。先ほどから美咲さんが施設に来ていて、北条菊野さんとの面会の後、ロビーで施設長と会って、うれしそうに

言葉を交わしながら仲良く施設長室に、さっき入ったところです。施設長から内線電話があつて、コーヒーを持って来るようにと、女子職員に指示がありました。今まで入所者の家族と面談をしても、コーヒーを出すことはなかったんですけど……いつもなら一時間くらいで帰られていたんですが、今日は長丁場になるかもわかりません。部屋の中で何をされているか……」

「わかった。ありがとう」

そう返事をする、龍二は通話が切れた画面をしばらく見つめていた。

「先生が携帯を見ている。勉強中は携帯を見たらあかんねんで」
近くにいた男子児童が言った。子どもの言葉を無視した。鼓動が速くなり、ふつふつと腹わたが煮え返っていく。龍二は廊下に出ると事務所に向かった。

「園長、急用なんで今から帰らせてもらいます。クラスをお願いします」

それだけを言い残すと、園長の返事も聞かず、自分の車を止めている駐車場に走った。「決着をつけてやる！」龍二は心の中で何回も叫んだ。

松崎龍二は四ヶ月前まで事務長として働いていた特別養護老人ホームの玄関前に立った。深呼吸を二回繰り返してから、足を一歩踏み出した。外側の自動ドアが開く。続いて内側の自動ドアが開く。左手にある事務所に視線を向けると、数名の知った顔がこちらを見ている。軽く左手を挙げ事務所前を通過する。だれも何も言わなかったし、出てくることもなかった。ロビーを通り抜け、階段を一步一步上がる。また鼓動が速くなってきた。「決着をつけてやる！」龍二は口の中に言葉を発した。

龍二は二階の施設長室の前に立った。目の前のドアを通して話し声が聞こえてくる。渋い施設長の声、それに、聞き覚えのある懐かしい明るい声、間違はなく美咲だ。それも笑い声が聞こえる。龍二と施設内で会って話したとき、あんな明るい声など出したこ

とはなかった。龍二が知らないあいだに、施設長との仲が進展していることが窺える。少し治まっていた鼓動がまた速くなってきた。ドアを蹴り飛ばして開けるか、ノックなしで入って驚かせてやろうかと思っただが、やっぱり見苦しいところを美咲には見せたくない。ここは冷静に対応しなければ、その後どんな状況になつていくかわからないし、何かことが起こる可能性だってある。右手に軽く力を入れて握り拳を作り、目の前のドアを叩いた。

聞こえていた彼女の明るい話し声が止まり、少し間を置いてから「はい」と渋い声で返事があつた。

龍二はドアのノブに手をかけ押した。四ヶ月前まで何回も出入りをしてきた部屋なのに、今は違和感を受ける。圧迫を感じる部屋の中へ身体を押し込んだ。部屋の真ん中にあるソファに對面する形で、施設長と美咲が座り、目の前から、龍二に向けられた二人の突き刺さる視線を感じた。

「何だね。何か用事か」

施設長のじろつと睨みつけた顔が迫ってくる。その横手から真剣な顔の美咲がいる。どう言葉を発すればいいのか。二人の顔を見てから、言葉を失ってしまった。

「用事がないのなら、帰りなさい」

渋い声で権力を振りかざしてくる。言いたい言葉が喉まで出かかっているのだが、出せない。彼女と二人きりなら出せる言葉でも、そばに施設長がいれば話せない。

「美咲さん、どこか二人きりで話ができませんか」

それだけを言うのが精一杯だった。美咲は龍二と視線を合わせたまま、何も言わない。その代わり瞬きを二、三回繰り返した。突然の言葉に少し驚いたのだろう。もう少し待てば返事がきそうである。

「失礼だろう。君は何を言っているんだ。美咲さんは、私に用があつて来ているんだ！」

横から施設長が怒鳴ってくる。

「わかっています。少し時間をください」

ここは冷静にならなければいけない。

「もう、私に付きまとわないうでください。会員クラブでのお付き合いは仕事の関係です。もう私のプライベートに入り込まないでください。今日でお会いするのは最後です。失礼します」

美咲はそう言い残すと、立ち上がり、龍二の横をすり抜け、部屋を出て行ってしまった。あまりの衝撃に呆然と立ち尽くし、何も言えず彼女を見送った。

身体が熱くなり、頭がぼよよとなった。これはどういうことだ。嫌われたということか。美咲に見捨てられた……、目の前が真っ暗になった。足下の土がパラパラと崩れていく。

龍二は、「これから、どう生きて行けばいいのだ……」小さな声でつぶやくと、涙が吹き出してきた。

もうこの場を立ち去るしかなかった。階段を降りロビーを横切る。自然と頭が下がり足下を見つめてしまう。玄関を出ようと自動ドアの前に立ったが、開かない。特別養護老人ホームの自動ドアは、外から中に入るときは、前に立つだけで開くが、中から外に出るときは自動ドアに触れなければ開かない。気が動転していたのか、そんなことも忘れてしまっていた。

玄関を出るとき、ちらつと事務所に向けて顔を上げた。ニタツとした表情の道中と視線が合った。龍二は急いで顔を伏せた。泣き顔なんか見られなくなかった。

車に乗り込み走った。家に帰ったところで、だれもいない真っ暗な寂しい家なんか、帰りたとは思わない。今は潮風に当たって熱くなった身体を冷やしたい。加古川に沿って長く延びる堤防に造られた道路のセンターラインを、睨み付けアクセルを踏み込んだ。

先ほど、ニタツとした道中の表情が気になった。あれは人を馬鹿にしたあざ笑いでは……。もしかしたら施設長に美咲のことをチクったのは道中ではないのか。事務所から伊藤相談員に電話を

かけたとき、道中も聞こえる位置にいた。美咲と施設長に引導を渡される場面に出くわすよう呼び出しをかけたのも道中だ。事務長のポストを得るために、施設長に取り入り、今まで手の込んだ芝居を演じていたのか。そう考えれば合点がいく。また身体が熱くなってきた。

加古川の河口付近に造られた海浜公園に着いた。公園の入口にある駐車場に車を止めた。他に車は一台も止まっていない。人影も見当たらない。車から出ると肌寒さが身体を締め付ける。同時に潮の匂いが鼻孔に漂った。辺りは薄暗くなっていた。目の前に松林が広がっている。その向こうに浜辺がある。松林の方向に歩いた。松林の間を遊歩道が続き、その片側に街灯が立ち、鈍い光が足下を照らしてくれた。前方から波の音が聞こえてくる。

浜辺に立つと目の前の海が黒く映り何も見えない。ざわざわと波の音が、この前が海であることを知らせた。海の上を渡ってきた冷たい潮風が龍二の身体を包んだ。

何もかも前に進まなくなってしまった。アフタースクールの職場だって、青山君のことがあって、先生たちから龍二を見る目がよそよそしくなり居心地が悪い。一時も心が安まらない。針のむしろだ。子どもたちはやりたい放題で、注意をしても聞かない。もう熱意もなくなってしまった。辞めたい心境だ。副園長の肩書きだって出向させるための口実で、だれも副園長だなんて認めていない。

生きがいだった美咲に捨てられ……、事務長に引き上げてもらった施設長に見放され……、黙々と龍二に尽くしてくれた妻に逃げられ……、そして特別養護老人ホームで最も信頼していた道中に裏切られ……、もう人生が終わったのと同じだ。立ち直れないほど追い込まれてしまった。

ゆっくり海の方に歩いた。靴の中に海水が入り、膝がズボンを通して冷たさを感じる。心の痛みを癒やしてくれる良い感覚だ。足を前に進める。腰辺りまで海水に浸かった。打ち寄せる波でバ

ランスを崩しそうになる。
龍二は立ち止まり、真っ暗な海面を見つめ、今までの出来事を
思い出していた。

参考

行	行
続分相応に風が吹く	分相応に風が吹く
せる110号	せる107号
2019年3月5日発	2018年3月5日発